

令和5年度  
北海道立総合博物館協議会  
アイヌ民族文化研究センター専門部会

議事録

日時：令和6年3月12日（火） 13時30分開会

場所：北海道博物館 講堂

令和5年度 北海道立総合博物館協議会 アイヌ民族文化研究センター専門部会議事録

会議名	令和5年度北海道立総合博物館協議会 アイヌ民族文化研究センター専門部会
開催日時	令和6年3月12日(火) 13:30～15:30
開催場所	北海道博物館 講堂
出席者	<p><b>【委員】</b>                      小川哲也委員(部会長)、白石英才委員、藤岡千代美委員、村木美幸委員、結城幸司委員、以上5名出席(欠席:関根真紀委員)</p> <p><b>【事務局】</b>                      石森秀三北海道博物館長、日置傑アイヌ政策推進局アイヌ政策課主任ほか</p>
傍聴者	0名
議題	(1) 令和5年度第1回北海道立総合博物館協議会実施報告 (2) 令和4年度アイヌ民族文化研究センター事業実施報告 (3) 令和5年度アイヌ民族文化研究センター事業経過報告 (4) 令和6年度アイヌ民族文化研究センター年度計画(案) (5) その他

※・単なる相づち及び言い直しなどは、原則として割愛する。

・内容に応じて《意見・提案》、《質疑応答》等の見出しを便宜的に作成した。

## 1 開会

会田学芸主幹：（開会の旨を述べる）

## 2 館長挨拶

石森館長：（本日の開催に至る経緯等に触れつつ挨拶）

## 3 北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会委員の紹介

（以下、発言の要旨を記載）

会田学芸主幹：本日もご出席いただいております専門部会特別委員の皆様をご紹介します。

令和5年12月8日に開催いたしました今年度第1回北海道立総合博物館協議会におきまして、本専門部会の設置が決定され、佐々木会長から、小川委員が本専門部会の部会長に指名されるとともに、同様に村木委員の兼任を含む5名の特別委員も会長から指名され、承認されております。

それでは、第5期アイヌ民族文化研究センター専門部会の特別委員の皆様を御紹介いたします。今回から新しい任期となりますので、ひとことごあいさつをお願いいたします。

（以下、名簿に沿って、専門部会委員を紹介）

小川部会長：小川です。よろしく願いいたします。

白石委員：白石です。専門は言語学で、サハリン・アムール地方の先住民族の言語である、ニヴフ語を研究しております。よろしく願いいたします。

藤岡委員：藤岡千代美です。生まれも育ちも札幌で、20代まではアイヌ文化について知らずに育って、それからいろいろ勉強しつつ、今に至っております。今は担い手育成に努めたいと思います、その活動を中心にしております。

村木委員：イランカラプテ、村木でございます。ウポポイの運営に関しましては、本当にたくさんの皆様に御協力をいただき、誠に感謝申し上げます。この専門部会は、昨年も任命されているのですが、昨年は体調が悪くて出席しておらず、今回が初めての出席になります。どうぞよろしく願いいたします。

結城委員：イランカラプテ、結城です。近現代までの歴史も含めて、北海道の人間の営みについての博物館ということで、大変期待しております。その中で、一生懸命やっていきたいと思っております。よろしく願いいたします。

会田学芸主幹：続きまして、北海道環境生活部の職員を紹介いたします。

（以下、名簿に沿って本庁出席者を紹介）

会田学芸主幹：続きまして、北海道博物館の職員を紹介いたします。

（以下、名簿に沿って博物館出席者、アイヌ民族文化研究センター職員、専門部会事務局を紹介）

### 《協議会の公開》

会田学芸主幹：本専門部会は、北海道の情報公開条例第26条の規定により、非公開に該当する要件はございませんので、公開の取扱いとさせていただきます。

### 《配布資料確認》

会田学芸主幹：議題に入ります前に、本日の配布資料の確認をいたします。

（以下、配布資料について説明）

それでは、このあとの議事進行につきましては、小川部会長にお願いいたします。

#### 4 議題

小川部会長：改めましてイランカラプテ、小川でございます。

(小川部会長挨拶)

最後に、議事の円滑な進行についての御協力をお願いしまして、御挨拶といたします。本日の議題は、お手元の次第にありますように、(1)から(5)まででございます。専門部会は概ね15時30分までを予定しておりますので、よろしくをお願いいたします。

##### 議題(1) 令和5年度第1回北海道立総合博物館協議会実施報告

小川部会長：最初の議題に入ります。議題(1)「令和5年度第1回北海道立総合博物館協議会実施報告」について、説明をお願いします。

会田学芸主幹：事務局から御報告いたします。

(以下、資料1に沿って説明)

小川部会長：ありがとうございました。今の報告について、特に「北海道博物館のあり方」に係ることにつきましては、この専門部会に対しても意見などを求められたところですので、委員の皆様から基本的なことの質問でも良いですし、御意見などがございましたら、発言をお願いします。

##### 《質疑応答・意見1》協議会資料について

小川部会長：協議会の資料をいろいろ読みましたが、なにしろ用語が難しいですね。「合議により取りまとめられた意見を求めることを諮問と呼ぶ」というのは、要は「我々委員の意見をまとめてください」と言いたいのだと思いますが、言葉が難しいので、資料を読むのがなかなか大変でした。もう少しシンプルになって、わかりやすかったらいいと思いました。

石森館長：小川部会長の御意見のとおり、今後なるべくシンプルにできるところはシンプルにさせていきたいと思います。

##### 議題(2) 令和4年度アイヌ民族文化研究センター事業実施報告

小川部会長：それでは、次の議題に入ります。議題(2)「令和4年度アイヌ民族文化研究センター事業実施報告」につきまして、事務局から説明をお願いします。

小川センター長：配布資料のうち、資料2及び資料3が今からお話しすることの資料です。

(以下、配布資料と議題の関係について概観したのち、資料2と資料3に沿って説明)

小川部会長：令和4年度のアイヌ民族文化研究センターの事業報告と評価結果についての説明がございました。ただ今の報告について、皆様からの質問・意見などをお願いします。

##### 《質疑応答・意見2》資料の収集・保存について

村木委員：資料の収集・保存が基本だということで、結構な数の資料が収集されていますが、この中で、購入した資料と寄贈された資料で差があるのか、どのくらい購入された資料があるのかというところをお聞きしたいです。それから、「資料審査会」というものが、どういったメンバーで構成されているのかをお聞きしたいと思います。

小川センター長：北海道博物館は、資料購入費はゼロなので、基本的にすべて寄贈でございま

す。資料審査会は、館長、副館長、部長、主幹の管理職以上と、資料担当の職員で構成した会議です。

#### 《質疑応答・意見3》 調査研究について

**村木委員：**「調査研究」の中で「海外とのプロジェクト」というものがありますが、「北海道とサハリン（仮）」は実施されていない事業だと思いますが、事業報告として上がっていて「仮」という記載は不思議です。事業計画であれば、まだ「仮」でも良いのかもしれませんが、報告で「仮」と記載されている理由について教えてください。

**小川センター長：**海外との共同研究は、道として友好協定などを結んでいる地域について、友好協定の延長線上で、北海道博物館が博物館同士の共同研究や交流といった文化学術交流を担うことになっているものです。具体的に今担っているのはカナダのアルバータ州とロシアのサハリン州です。お見込みのとおり、新型コロナ以降、事実上、交流できない状態です。こういった研究交流は、基本的には5年間ごとの期間を区切ってテーマを定めて、メンバーも見直して、という形で進めており、ちょうど新型コロナが流行したところで、5年が切れてしまいました。新しい期を始めなければいけないというステップになっています。アルバータについては、コロナの回復に伴って再開に向けて話が進められることになっていますが、サハリンをご存知のとおり、ウクライナの問題などがあり、外交関係上、お付き合いそのものがなかなか難しくなっています。以前のチームの任期が終わって新しい任期に入っている、けれどもその新しいチームの立ち上げや再開がなかなかできない状態なので「仮」のままになっているということです。

#### 《質疑応答・意見4》

**白石委員：**「研究成果の発信」のところで、紀要などの論文と外部からの依頼講演としては数本の実績があって、頑張っておられると思います。けれど、「学会等での発表」の0件が、どうしても目についてしまいます。これは、たまたま少なかったのか、あるいはそもそも学会発表があまりないのか、いかがですか。

**小川センター長：**他の年度であれば、学会での発表はありましたし、この次の令和5年度は1件ありますので、これからもあると思います。この年度は、新型コロナの関係で学会の多くで開催そのものが見送られたり、あるいはオンライン開催に限定されたという形になったことがあります。オンライン開催の方が現地に行かなくても参加しやすいという面もありますが、逆にオンライン開催なら発表自体を見送るという判断などもあり、この年度は0件になってしまったということかと思います。

#### 《質疑応答・意見5》

**結城委員：**印象ではありますが、久保寺逸彦さんにしても萩中美枝さんにしても、研究者の名前だけがクローズアップされていて、この人とタグを組んだと言いますか、最協力者であるアイヌの人たちの名前がもっとクローズアップされてほしいと思います。研究機関などで、研究者の名前が一線に出るという事情もあるかもしれませんが、アイヌの研究をした人だけではなく、それに対して協力したアイヌの人たちの名前も、もっとクローズアップしてほしいです。それからもう1点、最近言われているのが、アイヌ文化の多様性です。アイヌ

というイメージが一つではなく、いろいろな地域によって、いろいろな多様性がある文化だということを、もっと主張してアピールしてほしいと思います。

**小川センター長：**研究者の名が表に出がちだという御指摘は、まさにそのとおりだと思います。特に博物館の場合、例えば資料群の名前をつける際に、当館でも山田秀三や久保寺逸彦など、研究者や収集した人・寄贈した人の名前がついてしまいがちなところがあります。なおかつそれを使って展示や活動をやるので、その名前が展示会や行事の名前で表に出ることが多いと思います。一方で、一昨年、当館で開催したアイヌ民族文化財団の工芸品展のときには、担当者がかかなり意識をして、研究者の名前はほとんど出さないようにしました。写真のキャプションも「研究者が向けたカメラに対して、不審な目を向けるアイヌの子どもたち」のように付けました。久保寺逸彦が撮ったとわかっているものですから「久保寺逸彦撮影の写真」と書いてもいいのですが、あえて「研究者が」という言い方をすることで、立場を逆にしてみるとどうなるかということもキャプション上も工夫していたかと思っていて、その辺りのことはこれからも考えていかなければいけないと思っています。それから、博物館の事業報告の中で「クローズアップ展示」を御紹介しましたがけれども、その中では例えば萩中美枝さんのように、いわば研究者側を主人公にした展示もやれば、平賀サダさんや鍋沢元蔵さんなど実際にこの人がいなかったなら研究もできなかったのではないかという人を展示の主人公にしたものを意識していますので、そういったところから少しずつ取り組みを進められれば、とは思っています。

それから文化の多様性はまさにおっしゃるとおりです。例えば博物館のいろいろな資料キャプションやサインもアイヌ語で、となったときに、どこの地域の言葉を使うのか、あるいは逆にアイヌ語を使ってしまった時に、それがすべての地域のアイヌ語でそうだと思うれないような工夫をしたらどうするか。あるいは当館の総合展示の伝統的な家屋の復元は茅葺きですけども、旭川では笹葺きですので、そういったものの存在をどう意識づけるか、など、これからも工夫していかなければいけないと思っています。

#### 《質疑応答・意見6》

**村木委員：**「資料収集」の中で「公開に向けた関係者との協議」という項目があって、なかなか進まないのかなと思うのですが、一番進まない原因は何でしょうか。

**小川センター長：**一つには、特に北海道博物館への統合以後、なかなか忙しくて現地にまめに çıkかけてお話しする機会がなかったことがあります。もう一つ、「もっと早くやっておけば良かったのではないか」と言われればそこまでなのですけど、資料寄贈されてから、もう20～30年ですので、一世代経つと「うちの爺さんならわかったけれど、もう自分はわからない」というようなことになってくるので、直接お話ができる方を見つけることが難しくなっているという、二つが原因になっています。

**村木委員：**やはり調査が進まないと、資料の公開もなかなか難しいものが多いのですか。

**小川センター長：**そうですね。いま実際に所蔵している資料のうち、半分ぐらいは既に公開できていると思います。手を尽くしても関係者がわからなかった場合はどうするかということも当然残りますけれども、最初から、これはまったく駄目だなという資料はそれほど多くなくて、時間をかけていけば、ある程度充足できるかなとは見えています。

## 《質疑応答・意見7》

**藤岡委員：**アイヌ民族文化研究センターというところがあることは知っていましたが、アイヌ民族の文化を研究した結果や成果を、私たち現場のアイヌたちが、どう知ればいいのかという機会について聞きたいです。「教育普及事業」は実施しているそうですけれど、アイヌのなかには、この研究センターに直接近づく方法を知らない人がほとんどだと思います。こういうことをしているところだと、この専門部会に来て、初めて大体わかりました。20年くらい前には、札幌市では、職業訓練校というところがあって、研修として普段は見られない場所に行かせてもらって、着物の資料を見せていただくことがありました。その後、引き連れてくれる先輩方がいなくなって、そういった機関とどう携わっているかわからないこともあるので、研究成果がアイヌに直接繋がるような事業も入れていただきたいです。それから、私は古式舞踊等の保存会なのですが、歌や踊りの資料を見られる場所がほとんどありません。NHKなどが所蔵している資料は、その機関に行って、耳で聞いて覚えて、目で見えて覚えていきたいのですが、動画撮影も録音もできないというような形が今は大変多くて、なかなか保存活動に難しい現状があります。先輩たちがいなくなって、継承活動が途絶え始めていると言いますか。「もう危ないな」という危機感を持ったときにはもう遅いという現状になってきているのが今なので、現在のアイヌと、もっと繋がるような事業も取り入れていただいて、私たちの普及や啓発活動、伝承活動に繋がるお手伝いをしていただきたいと思いました。

**小川センター長：**お話の中にあつた、博物館の収蔵庫に普段しまつてある資料をご覧いただくということは、今でもできます。事前に「このメンバーで今度見に行きたい」と電話で連絡をいただいて、こちらの担当の職員がその時にちょうど博物館にいれば対応できます。1年間に10件ぐらいはそういった方がいらっしゃるのですが、私どものほうでの「実は私どもの博物館はそういうことができますよ」という宣伝がまだ足りてないということかと思えます。ホームページをよく見ると「この言葉がその案内みたいだ」というのはわかりますが、博物館として「こういうサービスをやっていますよ」ということを十分にお知らせできていないということだろうと思えます。とりあえずこの場では「できます」ということだけお伝えしておきます。それから調査研究の成果を、より直接その文化をこれから担っていく人たちに届けるということは、確かにそういう取り組みをこれから増やしていった方がいいと思えます。以前、白老でやらせていただきましたが、古い資料を公開するにあたっては、関係する方に見ていただかないといけないという時に、古い映像であればその映像を持って、こちらから地元に向つて、マスコミや和人の研究者ではなくて、実際にその資料に映っている、地元の関係者・ご遺族だけに限定した上映会をやらせていただいて、「あれは確かにうちの爺さんだ」や「あそこに写つてる背景の川はたぶんあの辺りだ」といったことを私たちも教えていただくということをやっています。こういったことをこれからまた各地で続けていけるといいのかなと思っています。それから、映像などの古い資料を使えるように、という話は、まったくそのとおりです。今から20年以上前にNHKが『アイヌ伝統音楽』の資料を少し組織立って整理をして各地で聞けるようにしたのですが、同じような形で今から30～40年前の録音や録画で、一定の手続きさえ踏めば皆が使えるようなものもおそらくあると思えますので、そういったものを、実際の地域の方が使えるようにする事業というものは、

私たちのこういった資料の収集や調査と並行して、もしくはその一環になるような形で取り組めるといいかなとは思っています。

**小川部会長：**結城委員と藤岡委員は、さすがですね。私自身も北海道アイヌ協会とアイヌ民族文化財団の理事で感じているところがあって、博物館というのは、もちろんそういうものですけれども、どうしても昔のアイヌがやったことをフォーカスします。このお二方は今、現在進行形で文化を作っている方たちなので、やはりその昔から現在までの悠久ロマンでもないですが、やはり現在までのことも、もっとフォーカスされるべきだと思っていましたので、そういう意見が出るのはさすがだなと思いました。

### **議題（3）：令和5年度アイヌ民族文化研究センター事業実施経過報告について**

**小川部会長：**議題（3）「令和5年度アイヌ民族文化研究センター事業実施経過報告」について、事務局より説明をお願いします。

**小川センター長：**既に今年度もあと一ヶ月足らずのところでございますが、今年度の2月末時点までの経過につきまして御報告いたします。お手元の資料4をごらんください。

（以下、資料4に沿って説明）

#### **《質疑応答・意見8》**

**村木委員：**釧路で行った巡回展は、来場者が3000人超えで、前の年の倍以上になっていますが、その要因があったらお教えてください。それから「普及啓発」のうちのアイヌ文化紹介小冊子『ポンカンピソシ』は、どういった形で配布しているのかということと、それから年間で大体どのくらいの冊数が出ているのかということと、もし把握していれば教えてください。

**小川センター長：**巡回展は、毎年開催している会場が違うので、なかなか一概に比べられないです。釧路市の場合は、ちょうどこの時期はいろいろなことでインバウンドの方も含めてお客様が多かったことがあるかなと思いますし、地元で新聞やFMラジオで宣伝していただいたという効果があったかとは思っております。そういった意味では会場に左右されるところがあります。以前ですと、上川町の大雪山でやったときに、小さいビジターセンターでしたが、夏場で観光客の方が来場して、さらに山を登る方は地名に関心があるので、夏場の開催で7000人いらっしゃったということもあります。そういう意味ではいろいろな方に知っていただく時に、どこで行うかは結構大事だと感じています。逆に、例えば奥尻はこういう機会でもなければなかなかできないので、何もしないでいたらアイヌに関して学ぶ機会がなかなかないという地域は、たとえお客様が少なくとも出かけて行ったほうがいいかとは考えています。アイヌ文化紹介小冊子については、最初に刊行した時は道内すべての学校にお配りしましたが、以後はそれぞれの学校からお求めがある時に応じてお送りするという形でお送りしてございました。ただ最初の発行から10年、20年が経つと、そもそも学校の先生がこれをご存知ないというケースが出てきましたので、昨年度（令和4年度）の終わりに「こういう冊子を作っております」というリーフレットをもう一度作り直して、それを道内のすべての学校にお送りしました。その結果、今年度に入って、道内の複数の学校から「それだったら使わせてほしい」とお申し出いただきました。先ほどの藤岡委員の話で、これからの担い手の人たちにも博物館の側からきちんとアプローチしてほしいという話もありましたが、そうい

った形で定期的に私どもから学校の方に「こういうものがあるので使ってほしい」ということを、ある程度の頻度でお伝えすることは大事だと思ったところです。

### 《質疑応答・意見9》

**白石委員：**「教育普及事業」に関して、行事の参加者数は数えていましたか。どこかの統計資料にはあるのかもしれませんが、先ほどの巡回展のような感じで、大体の参加者数があれば参考になるかと思います。

**小川センター長：**人数はわかっています、別途集計したものがありますので、ざっと読み上げる形にするか、後で皆さんにお知らせする形がいいでしょうか。

**白石委員：**会場はここでしたか。

**小川センター長：**基本的にはこの講堂を会場にしています。

**白石委員：**上限は大体20人くらいでしょうか。

**小川センター長：**満員で入ると80人です。ただワークショップ系になると、参加者全員に道具が行き渡らないといけないので、最初から人数を20人・20組という形で絞っています。

**白石委員：**いつも定員の7割8割ぐらいは来ているという感じでしょうか。

**小川センター長：**講座だとアイヌ関係は定員の6~7割ぐらいが多いです。ワークショップ系は人気があって、半分以上は埋まることが多いと思います。

**白石委員：**「参考資料」の、展示会アンケートの自由記述の結果では、まず満足度が非常に高いですね。一番低いのは、令和4年度の伊達市での巡回展ですが、それでも96.3%で、令和5年度の巡回展は両方とも100%ということです。こういう展示会のアンケートの平均がどれくらいかわからないですが、とてつもなく高いなと驚いています。さらにもう1点、令和4年度に比べて令和5年度のほうが自由記述の中の満足度も高いような気がします。展示自体が違うのかもしれないですが、ざっと見た感じでは、令和4年度の方は「文字が小さい」や「わかりにくい」という内容がありますが、令和5年度になってくると「非常にわかりやすい」というものが出てきています。令和4年度の最後には「文字が大きく見やすい」とあります。これは、やはり自由記述を見て「次年度はこう改善しよう」と対応されているのでしょうか。

**小川センター長：**まずお配りした資料の説明が足りていませんでした。前年度の専門部会で、こういった巡回展を開催した時の参加者の方のアンケートの声を知りたい、特に数字でまとめられた「何%」だけではなくて、自由記述のところを是非知りたいということでしたので、今回の専門部会で「参考資料」として付けさせていただきました。かなりボリュームの大きい資料になりますけれども、ご覧いただければありがたいです。そのうえで満足度については、アンケートの取り方が「満足」と「やや満足」の2つを足して「満足度」としているので、どうしても満足度が高めになりがちな計算ということもあって、他の施設に比べると確かに数字が高いほうかなと思います。アイヌ語地名・アイヌ文化関連は割と満足度の数字がいつも高いかなと思っておりまして、満足度100%はこれが2回目です。以前、枝幸でアイヌ文化巡回展を開催したときに、会場が無料だったこともあると思いますが、3桁のアンケートの回答数が集まって、なおかつ100%だったので、自分たちで実施していても結構高いなと感じたところはあります。ただ、会場のおかれている条件もかなり反映しておりまして、文字の大きさについては、こちらも毎回気を遣ってはいるのですが、展示会場との関係で同

じ大きさの文字でも小さく見えたり、ガラス越しだと見づらかったりということがあり、それが数字に反映するというにはあるかなとは思いますが。ただ、基本的には、今お話があったとおり、「直近のアンケートで駄目と言われたところは、次は気をつけよう」という形で改善を図っておりますので、そこはアンケート結果にも少し反映されているかなとは思いますが。

**白石委員：**私もちょうど昨日、大学の授業評価アンケートをやったところです。自分のものを毎年受け取るので、アンケートではひどく書かれることも分かっていますので、この満足度や自由記述の内容に、本当にすごいなあと思った次第です。

#### **議題（4）令和6年度アイヌ民族文化研究センター年度計画(案)について**

**小川部会長：**それでは、議題（4）「令和6年度アイヌ民族文化研究センター年度計画(案)」につきまして、事務局より説明をお願いします。

**小川センター長：**今度は資料5により、令和6年度アイヌ民族文化研究センター年度計画(案)につきまして、ご説明いたします。

（以下、資料5に沿って説明）

**小川部会長：**ただいまの説明につきまして、ご質問やご提言がございましたら、発言をお願いいたします。

#### **《質疑応答・意見10》**

**村木委員：**「教育普及」の中での「団体対応」という形で、アイヌに特化したレクチャーが年間30件くらいとのことですが、前の年も、その前の年も今年も30件なので、これは希望があれば全部受けてたまたま毎年30件だったのか、それともマックスで30件くらい受けるという形なのか、教えてください。それから、もうひとつ、先ほどの資料の収集にあたって、購入のための予算がゼロという話でしたが、これは財政を考えた上で博物館から予算要求をあげないのか、要求をあげたけれど削られるのか、というところをお教えてください。

**小川センター長：**後ろの方の資料購入予算からお答えします。この北海道博物館の前身の一つは北海道開拓記念館ですが、その時から、資料購入の予算はゼロです。喫緊に必要なが生じるときだけは、いわゆる補正予算のようなものを組んでいただいて、臨時に購入したというケースはないではないです。あるいは、職員が獲得した外部の資金で、金額では数万円ですけれども資料を買って、それで買ったものは所属機関に寄贈しなければならないので、それは博物館で収蔵するというケースはございますが、予算組みとしては昔からないです。

次にグループレクチャーにつきましては、来館くださる学校の中でご希望されるところを対象に実施しており、件数を足していくと大体年間百数十件あります。一番多いのは博物館の展示全体のダイジェストをお話するというメニューなのですが、それ以外にいくつかのメニューを用意してあって、その中のひとつがアイヌ文化です。これは展示全体のダイジェスト以外では一番多いです。私ども職員が分担して引き受けるのですが、余りに多いとさすがに無理だろうということで、一応グループの中で、「年間1人何件までは受ける。それをマックスにすると、掛ける合計で何十何件がマックスになる」という内々の取り決めはしていますが、それを超えたことはないで、今のところはいただいたお申し込みはすべてお引き受けしています。もちろん職員とうまく都合が合わないとか、いろいろなことでやむなくお

断りするケースがないわけではないですけれども。年間で30件ですと、研究センターの職員がいま7名いますので、1人年間4件で、1ヶ月に1件あるという月が4ヶ月だけなので、そうやって均してしまえばそれほど数ではないので、今のところ、これくらいの数ならこなせるかというところです。

#### 《質疑応答・意見11》

**白石委員：**「調査研究」のところの「北海道博物館全体で取り組む『樺太記憶継承事業』」ですが、これは具体的には何かありますか。

**小川センター長：**これは、樺太から引き揚げてきた方たちが昭和23年に作られた全国樺太連盟という、相互援助組織がありまして、そちらが会員の高齢化を主たる理由として、解散せざるをえないというふうになりました。解散にあたって、全国樺太連盟がお持ちであった資料を、樺太の記憶を継承するために、道で引き継いでほしいというお話を、石森館長が着任される頃に初めてその話がありました。ちょうどその頃に、この博物館が統合ということで、実際に資料を受け入れるまでに10年近くかかりましたが、令和3年に資料を受け入れまして、そこからこの樺太記憶継承事業ということで、全国樺太連盟から寄付金をいただきまして、それを基金として積み上げて、その基金は15年かけて使うということでいただいた資料の目録をつくる、それから、いただいた資料をデータベースのような形にしていろいろな方が使えるようにする、あるいはいただいた資料を各地の展示会に活かすという形で、樺太の記憶を継承していこうという事業です。

**白石委員：**資料は文書や写真といったものですか？

**小川センター長：**資料は、樺太連盟が、文字どおり樺太の記憶を継承するために、会員、つまり実際に引き揚げてきた人や、そのご遺族に呼びかけて、資料を募って寄せられたものです。結果的に見ると、樺太時代に「こういう服を着ていた」「こういう鞆を持っていた」「引き揚げの時にあまり物を持って帰れなかったが、これだけは大事に持ってきた」という生活用品です。それから樺太で使っていた教科書などの書籍や、引き揚げてきてから編纂された、それぞれの地域ごとの、「豊原会」「大泊会」といった学校の同窓会や地域の人たちの会報などが、主な中身になっております。数でいうと、樺太連盟のまとめた段階で6000件ほどありまして、一部は稚内市にも委譲されましたが、稚内に委譲されたものも含めて、トータルでの目録を作っているところです。ただ、この専門部会との関わりで、あえて少し厳しいことを申しておきますと、樺太連盟の会員の多くが、いわゆる和人でして、アイヌを含めた先住民族は、なかなかその会員になってないということもありますので、樺太連盟だけの「記憶の継承」ですと、実は樺太のアイヌの人たちの歴史の継承にはなかなかならない、といったところがあります。そのあたりは、資料をお引き受けした時に託された樺太連盟の方々の思いを大事にしつつ、樺太という地域を知っていただくためには、さらにこういったものが必要かということ、博物館側で意識しておかないといけないとは思っています。

**藤岡委員：**今のお話を聞いて、樺太のアイヌに繋がるのかと思いましたが、なかなか違うのですね。現状では、新たに北海道アイヌ協会の会員になるためには、除籍謄本というものを取らなければならないので、アイヌ協会の会員はとても減っています。「自分の親はアイヌだと言っているけれども、あちこち調べても結局駄目で、今年度も本会員になれない」という人もいます。特に東北系譜だと難しいです。どうしても、私はアイヌのことを考えてお話し

てしまいますが、アイヌに繋がるような、「ここに聞いたら、ここに行ったら繋がるよ」というような研究をしていただきたいです。会員が減らないように、そのような研究をしてほしいです。特に東北系ですね。今ではもうアイヌではないと言われていた人たちがいるということにも繋がってきてしまっている現状もあって、そういうような研究もしていただければうれしいです。それから、問い合わせたら何か教えてくれるのでしょうか。

**小川センター長：**事業報告のなかでレファレンスが1年に何十件かあると申しましたが、その中には極々稀で、本人もたいへん慎重に来られるのですが、「自分はどうも、ある地域のアイヌが曾祖父にいますよだけれど、どうやったらわかるか」という問い合わせをいただくことがございます。「自分のルーツに関して、聞いている話はあるけれど、確かめようがない」というケースは、やはり何度か伺ったことがあります。私どもの方でも、「こちらでわかる限り、その地域であればこういう方法があるかもしれない」、「私どもが調べた限りで、こういう記録があって、そこにこういう名前が出てきて、この中にあなたが聞いているご先祖の名前がないかを探すという方法があるかもしれない」といったことはお知らせするようにしておりますので、私たちとしても、できる限りのことはしたいと思っております。ご指摘のとおり、東北になると難しいですね。北海道であれば、ほとんどの地域において明治の初めの時点で、良いか悪いかは別にして、戸籍で判別できます。けれども、東北はそれが江戸時代にもう終わってしまっていてできないので、かなり難しくなっています。さきほど申し上げたように、古い記録をたどって行って「この名前は明らかにアイヌの名前であると特定できる」というように繋がりが確かめられると何とかかなかなとは言えると思います。そういうことも含めて、まずお尋ねいただいて、こちらの方でもできる限りのことはしてみることにしたいと思います。その関わりで、今、特にアイヌの人たちに対してかなり心ない言い方をネット上などで言うことが出てきてしまっているの、仮に自分がそういう出自であるとしても、それを外に出すということ自体を相当ためらわざるを得ないということが増えてきています。それはあまりよくないことだと思っておりますが、事業報告でも申し上げた国立アイヌ民族博物館のネットワークを作っている目的のひとつはそういうところへの対応にあります。私どもの博物館だとアイヌ文化の専門の職員が何名かいるので、何か無茶苦茶な話が来ても「それは無茶苦茶だ」と言って返せるのですが、道内の自治体あるいは道外の自治体だと、専門の職員をほとんど置いていないので、無茶苦茶な話が出てきたときに、それが無茶苦茶かどうかを判断しかねて、判断が止まってしまったり、流されたりするということが起きますので、そういったところに対して、「基本的な事実はこちらだ」「歴史の大きな流れはこちらだ」というところを共有していけるようなしくみを作りたいなと思っております。

#### 《質疑応答・意見 12》

**小川部会長：**この年度計画に対して、この専門部会の意見は反映されるのか、いかがでしょうか。そういう効力のようなものがあるのでしょうか。

**小川センター長：**制度上の効力はありませんが、私たちが何のために協議会を開いているのかというと、やはり協議会を通していろいろな方のご意見・ご要望を聞いて、それを博物館に生かすためなので、制度上の縛りというより、そもそもそのために協議会を開いています。本日いただいた御意見は、既に動かせないものは仕方がないですけれども、例えば「展示会

や事業のあり方についてこうしていった方が良い」や「こういったところで働きかけをしていったほうがいい」という御意見を今日たくさんいただいたので、実行可能なものから順番にやっていくということにはなると思います。

#### 《質疑応答・意見 13》

**小川部会長：**結城委員もいらっしゃるので気になったのかもしれないですけど、マレウレウのアイヌ音楽ライブは2年連続の開催ですね。ほかにも依頼できる方がいると思いますが。

**小川センター長：**マレウレウのライブについては、実は、この博物館ができた年にお越しいただいたんです。以後、基本的に文化の日の前後にマレウレウのライブをずっと続けておりますが、御指摘のとおり、当然、博物館でマレウレウ以外のものをやらないということではありません。一昨年からはスルク&トノトさんにも来ていただいています。それから、直近はなかなか機会がありませんが、2018年、いわゆる北海道の命名150年の時は、当館で松浦武四郎の展示会をやったということもあって、平取と千歳などのいわゆる保存会の方にお越しいただいて伝統芸能の披露をしていただいたということはありますので、そういった形のプログラムはこれからも取り組めると思います。

**小川部会長：**ぜひ専門部会の意見がとおるような年度計画にしていただければと思います。

#### 議題（5）：その他

**小川部会長：**次に「その他」ですが、皆様から何かございましたら、御意見や御報告、感想など、自由な御発言をお願いいたします。

**藤岡委員：**皆さんは研究される立場ですが、私はどうしてもアイヌということにおいて、こういったことを全部見てしまいますので、私たちに何か繋がることのできるような形の協働体制でやっていただきたいというのが、私の思いです。私も北海道博物館には初めて来ましたが、札幌の皆が来られるような周知をして、普段は見られない資料を皆で見学に来たり、子どもたちを連れてきたり、知り合いのアイヌたちにも「行ったら資料が見られるよ」という形で繋がりをつけたりして、この博物館を応援できるアイヌを増やすような協力をしていきたいとしますので、アイヌに協力できる体制で考えていただけたらうれしいです。お願いいたします。

**結城委員：**チャンスがあって海外の博物館をいろいろ回らせてもらうことがあって、ついこの間もニュージーランドに行ってきました。そちらはとても明るいのですが、ここに来るといつも少し閉鎖的なイメージがあります。札幌ピリカコタンもそうですけれど。ぜひとも、そういうことも含めて考えてほしいです。また、海外に行くと、その土地の先住民の世界観を、たいへん大事になさっていて、それがアートに繋がったり、いろいろな歴史観なども超えて表現されることも多いので、是非とも、そういう世界観ごと展示できるようなイメージがあったら良いと思います。それから、ウポポイさんは少し取り組んでいらっしゃいますけれど、近現代から今のアイヌに繋がるイメージが、同じ北海道に共に住んでいる、違う文化を持っている人間たちというところに繋がるような道は、どこかでやってほしいと思います。それがいわゆるヘイトスピーチの槍玉にあがる危険性はあるかもしれませんが、それでもやはり今を生きているというところを上手くつなげてほしいということが、私からの要望です。

**白石委員：**前回もご質問したと思いますが、やはり今はサハリンなどロシアの研究機関と一緒にやっていくということが、とても難しいと思います。それは非常に歯がゆいことですので、私もいま調査に行けないですけれども、いつかは必ずまた再開するということを信じて、それまでの間は手元にある資料などを使って、何とか頑張っけて続けていくしかないのかなと感じておりました。

**曾根副館長：**サハリンとの交流は、北海道とサハリン州が1998年に友好提携を結んで、その中の文化的な交流として、北海道博物館とサハリンの博物館・研究機関と交流が始まりました。北海道庁自体もサハリンに事務所を置いて、そこに職員を派遣していましたが、このウクライナの情勢で、職員は引き上げております。ただ、まだこの先の交流の可能性ももちろん、絶たれたわけではないので、事務所自体は引き続きそのまま維持をした形で、いまは半年に1回ぐらい、サハリンの方に実際に行って、事務所の状況の確認や、もし会えばサハリン州政府と会って事務的に話をするという事はしていると聞いております。今後の可能性は、どちらかというロシア次第ですけれども、まだ残っていると思っております。

**村木委員：**ウポポイもそうですけれども、多くの修学旅行生が団体で来てくださることが多いです。そういった時に要望があれば、博物館の展示の仕方などのレクチャーはしますし、子どもたちとの質疑応答や事前学習を受けられるところは受けていますが、それ以外のところでは、要望があってもそれが全部できる話でもない状況です。ただ、そういった子どもたちの学習が、これからのアイヌ文化に与える影響は大きいとずっと思っていて、子どもたちが学びに来てくれるというチャンスは逃してほしくないと思います。国立の博物館は何となく敷居が高いような気がしているのでウポポイもそうなのですけれども、学ぶ場所としての博物館が、もっと気楽にできるような形で運営していただければと思います。研究している側としては、毎日がほとんど自分たちで時間を作っていくてはいけないところもありますけれども、一般の来館者と関わる時間はあまり多くはないと思います。ただ、そういう博物館側と来園者との関わりが密になることで、博物館のファンも増えていき、そういう中でアイヌ文化のしっかりとした情報が発信できるということが相手に伝われば、リピーターの方々も多くなりますし、その子どもたちが家に帰って家族と話をするといったことで広がっていくと思うので、これは自分にも言っている話ですけど、そういった部分を大切に運営をしていただきたいというのが一番の要望です。

**小川部会長：**私からの要望ですけども、我々アイヌと学芸員の方との交流や意見交換の場をぜひ館長の名のもとに作っていただければと思っております。理由なんですけれども、北海道博物館にいた幕別町教育委員会の添田学芸員と、2年にわたって幕別の生活館・蝦夷文化考古館を交付金で建て直す事業に関わったのですが、学芸員をオタクと言ったら怒られるかもしれないですけど、そのオタクが持つ潜在能力は、すごいものを持っていると感じています。添田学芸員は北海道博物館出身ということで、「北海道博物館はどんなところだろう」と思っていたら何故かこういう立場になってしまいました。それで、そういった学芸員の人たちがいろいろな物事を掘り下げる能力に、これからの日本全体への影響力があると私は思っています。また、博物館自体もお金が云々という話も、前回の協議会でも出ていましたけれども、私は学芸員の方たちには、いろいろな物事を掘り下げて、例えば北海道博

博物館が、博物館として日本初の上場をして、自分たちでお金を生み出すといったことができる能力があると思っています。いろいろなジャンルがあって、いろいろな人がいると思いますが、できればそういった人たちと意見交換をして、我々アイヌのことに対しても「もっとこういうことをしてほしい」といった話をできるようなきっかけを作っていたら、と思っています。よろしくお願いします。

**小川部会長**：最後に、事務局からありましたらお願いいたします。

**小川センター長**：既にご存じかと思いますが、全国の大学博物館が同じように問題になっておりますけれども、当館につきましても、アイヌの方々の御遺骨が7体ございます。これらについては、全国の他の博物館や道内の他の博物館と同じような形で、早期に地域に返還するというに向けて、現在取り組みを進めていて、昨年11月に出土地域への返還の手続きについて定めさせていただき、いま返還の申し入れを受け付けている段階でございます。それが大体5月までになっております。ただ、これもご承知かと思いますが、当館のご遺骨の場合、こういう受け付けをすれば、それぞれの地域からパッと手が挙がるとは必ずしも言えない地域、特にアイヌ協会の支部がない地域の御遺骨もございますので、そういった地域については、ただ申請を待つだけではなくて、私どもの方からそれぞれの地域の自治体や関係の方々のところに出かけて行って、なるべく地域にお返しできる方法はないかというお話し合いをさせていただきながら、最後までその努力を続けてみようと考えております。これは来年度の専門部会の際にはそういった努力の結果、どうなっているかという御報告をすることになると思いますけれども、博物館の方では、今こういった状況にあるということをお伝えして、このことに関しましても皆様からの御意見・御要望があれば、お寄せいただきたいと思っています。

**小川部会長**：本日、皆様からいただいた御意見は、今月に開催予定の第2回博物館協議会にて報告いたします。それでは、すべての議題について協議を終えましたので、本日の専門部会の司会進行を博物館にお返しします。

#### 4 閉会

**石森館長**：本日は本当にお忙しい中、貴重なご意見を賜りましてありがとうございました。

(以下、閉会の挨拶)

**会田学芸主幹**：それでは、これもちまして本日の専門部会を終了いたします。小川部会長、委員の皆様、長時間にわたって御協議くださり、ありがとうございました。